OPINION

２２世紀に向けて

村越　真

ＯＬは特殊なスポーツ

今年８月に、秋田で開催されるワールドゲームズは、五輪と並ぶマルチスポーツゲームの一つである。世界選手権やワールドカップと違い、様々な種目が一同に会するこのゲームの準備ではオリエンテーリングの特殊性をしばしば実感させられる。競技の多くが観客の見えないところで展開される、そもそも観客という概念がなく、観客の多くは自分たちもオリエンテーリングをしにきた愛好者である、体育館のような競技施設は使わないが地図作製に莫大なエネルギーと時間が必要である、など一般のスポーツでは考えられないことである。

こうしたオリエンテーリングの特徴は、観客・メディアにとっての分かりやすさ、エキサイティングなレースという視点ではいずれもデメリットである。ＩＯＦを初めとする様々な組織がデメリットを打破する試みを行っている。パークＯはその中でも成功した試みの一つである。ノルウェーではパークＯをＴＶ放映する試みが成功している。

しかし、これらのデメリットは、二昔前までは、むしろメリットと考えられていた。見るだけでなく、どんなレベルの愛好者もトップ競技者と同一のアリーナで競技できるオリエンテーリングは生涯スポーツの理念を具現化したものであった。膨大なエネルギーが必要な地図、そして一品生産の大会も、多くの人が大会に主体的にかかわることを可能にする参加システムと捉えることもできる。

メリット・デメリットという評価は相対的なものであり、時代によって揺れ動くものだ。だが、オリエンテーリング自体の特徴は変化することはない。パークＯがどんなに普及しても森でのオリエンテーリングが正統であろう。仮にそうでなくなったとしても、未知の場所でのナヴィゲーションスポーツという特徴は決してなくなることはない。そして、この本質が残る限り、上に挙げたような「メリット」も「デメリット」も残り続けるだろう。

特殊性を生かした普及・発展を

競技で成功するためには、自分自身の能力や特徴をよく知ることが出発点である。オリエンテーリングがスポーツとして成功する上でもこの原則は当てはまる。なにしろ、「競争相手」である多くのスポーツはメディア・スペクテータへの分かりやすさという点で、オリエンテーリングよりもはるかに優れている。オリエンテーリングの持つ特徴をよく把握し、その限界と可能性を見極めることが必要である。これらのスポーツと互していく時、本当にメディアとスペクテーターへの分かり易さは、１００年先まで生き残るための

コンセプトとなるだろうか？

たとえば、オリエンテーリングを革新していこうとする努力の中で、近年もっとも成功したものとしてパークOがある。パークOの成功の一因はメディアや観客への分かり易さにあると言われている。しかし、パークOが世界的に成功したのは、パークという凝縮された空間の中にも、未知の世界のナヴィゲーションという要素があったこと、そしてエリートも初級者も同一のアリーナで楽しむことがでいたという点も見逃してはならない。オリエンテーリングの本質であるこうした要素があったからこそ、トップレベルのＰＷＴから、ローカルレベルの競技会まで、パークOは広く普及し始めているのである。

キーワードは、「未知の世界」と「ナヴィゲーション」

２２世紀まで生き延びるキーコンセプト、それはオリエンテーリングの本質「未知の世界」と「ナヴィゲーション」にある。このコンセプトがあってこそ、オリエンテーリングはナンバー１にはなれなくても、オンリー１になれるのである。これからも、オリエンテーリングをメジャーにする様々な努力が行われるだろう。その時、「未知の世界」と「ナヴィゲーション」というコンセプトが常に意識される必要がある。

たとえば、今教育の世界では「生きる力」をいかに育てるかが問題になっている。公教育で「生きる力」などという漠然とした能力を育成することが可能だとは思えないが、少なくとも社会的にはこうした能力を子どもが失いつつあることは確かである。生きる力の根底には危険を回避したり、未知の出来事に備えたり、情報を整理・活用したりといった能力が必要だ。これらは全てオリエンテーリングの中で日常的に行われていることなのである。

読み書きそろばんという言葉があるが、日常生活の中では、ナヴィゲーション能力の方がよっぽど重要なスキルである。だが、学校教育の中でも日常生活の中でもナヴィゲーションスキルを学ぶ機会は皆無に近い。現代の複雑な都市では、地図を読みこなして、的確に目的地に到達できることは、時間の節約・危険回避など様々なメリットをもたらしてくれる。ライフセービングが競技的なスポーツという側面と人の命を救う技能を高めるという両側面があるように、日常生活の中でのナヴィゲーションスキルに対して、オリエンテーリングは大きな貢献ができるのではないだろう。

少子化に伴い、一人一人の子どもの「価値」はますます高くなっている。将来を担う子どもたちをどう守り育てるかは２１世紀の大きな課題である。また高齢化と労働時間の短縮で、仕事以外の領域で充実感を味わい、豊かな人生を送ることも２１世紀のもう一つの課題である。オリエンテーリングは、その本質とそこから派生した特徴によって、これらの課題に対処するだけのものを持っている。

２２世紀を迎えた時、「１００年前によくこれだけの発想でスポーツを方向づけることができた」そう社会に認められるスポーツでありたいものだ。